助太刀して彼妻のもとに行て對面しけるに、もとゆひの間より髪の長く出て、もとゆひは其まま有しとぞ、

〔壺の石文九貞女烈女の判〕今の世　ときわぎ物がたり

延寶年中の比とかや、武藏の國とねづと云ふところに住ける小澤氏といふ人、松といふむすめをもてり、かたちすぐれ心おとなしかりけるを、十七のとし、おなじあたりの野口氏と云人にめあはす、女心いとうつくしかりければ、夫につかへてうやうやしく、舅姑によめづかひ孝行なり、野口が父母天然の後、男不幸にして癩になりにける、○略中松一人のみ夫をはごくめり、○略中松が父は、○略中我切におもふむすめを、見ぐるしきかたひにあづけをくこそ遺恨なれ、とりかへして異人にゆるし、ゆたかなる末の代をも見ばやとおもひ、むすめをよびてそのやうをいへば、女はなみだ隙もなく、漸々いふやう、いとこそなさけなきおやたちかな、かれをわれさへすてなば、たれかこれをはぐゝみてん、ひと日のうちに死にこそうせめ、よにあるときばかり夫にてかくなりはてゝは夫にあらずや、夫の不幸は我不幸なり、再嫁の事はゆるし給へ、ともかうも病夫をこそ見はてめといひすてゝ、庵にかへり、其後はおや里へもゆかず、○略中野口も我ゆへに、妻にさへうきめを見せ、あらぬありさまのおとろへをくるしみてあることよとおもひ、或時女にむかひていひけるは、我こそかゝる身となれ、そこはなどわれゆへにあさましき目を見せむや、父母のためも恥辱なれば、里に歸り、いかなる人にもあひなれて、行末めでたき有さまをきかば、さてこそわれもうれしからんといへば、女はうつくしうわらひて、つれなき人のことばかな、千代とかねたる夫の、あしきやまひうけたまひ、今かくあさましく成給ひしほどにとて、それを見すてゝ、又富貴なる人に嫁せんや、よにある時のみが夫婦にて、かくおとろへたるときは夫婦ならずや、君つゝがなくて、我やまひをうけば、すて給はんや、返す〳〵なさけなき人の心かな、せひそひ給